

Turner, Victor. 1974. *Dramas, fields, and metaphors: Symbolic action in human society*. Ithaca, NY: Cornell University Press.

(＝梶原彰昭『一九八一年『象徵と社会』紀伊國屋書店』)

Valentine, Scott Victor. 2010. Disputed wind directions: Rein-vigorating wind power development in Taiwan. *Energy for Sustainable Development* 14: 22-34.

Vogel, Ezra F. 1991. *The four little dragons: The spread of industrialization in East Asia*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Wang, Lisa. 2008. New energy policy needed: CPC. *Taipei Times*, March 24. <http://www.taipeitimes.com/News/biz/archives/2008/03/24/2003406921>.

Watson, James. 1985. Standardizing the gods: The promotion of T'ien Hou (Empress of Heaven) along the south China coast, 960-1960. In *Popular culture in late imperial China*, ed. David Johnson, Andrew Nathan, and Evelyn Rawski, 292-324. Berkeley, CA: University of California.

Weller, Robert, and Hsin-Huang Michael Hsiao. 1998. Culture, gender and community in Taiwan's environmental movement. In *Environmental movements in Asia*, ed. Arne Kalland and Gerard Persoon, 83-109. London: Curzon.

Weller, Robert. 1999. *Alternate civilities: Democracy and cul-*

ture in China and Taiwan. Boulder, CO: Westview.

Wikileaks. 2010. Taiwan's Fourth Nuclear Power Plant: Hurdles. Cable 05TALPEI11640, created 6 April 2005. American Institute Taiwan, Taipei. <http://wikileaks.org/cable/2005/04/05TALPEI11640.html>

鹽寮反核自救會 二〇一一年 不要讓負薪變成下一個福島——四三〇反核四活動 <http://www.wretch.cc/blog/giyu1323>

訳者付記

基本的に固有名称は原文に従って現地における表記(繁体字)としたが、日本でもよく知られる固有名称(例:国民党)については、随時日本語表記を用いた。

英語原文

Fang-Long Shih, "Generating power in Taiwan: Nuclear, political and religious power." *Culture and Religion: An Interdisciplinary Journal*, 13:3, September 2012, pp. 295-313.

©2012 Taylor & Francis

テイラー・フランシス社の許可を得て翻訳・転載。

原発と宗教

チェルノブイリ・アイコンによる記憶の伝播と共有

一 チェルノブイリ原発事故の解釈と追悼の広がり

チェルノブイリ原子力発電所事故(以下「原発事故」とは、一九八六年に当時のソ連邦で起きた原発事故である。この原発事故によって放射性物質に汚染された地域は、チェルノブイリを中心に、現在のロシア連邦、ウクライナ、ベラルーシの三国にわたる。当時の死者数は事故処理作業員の三三名(ソ連政府発表)であるが、その後、被曝による疾患と考えられる症状によって亡くなったり、長期治療に苦しむ作業員や住民が多数出ている。

チェルノブイリは、現在、ウクライナの北部に位置する都市である。チェルノブイリという名称は、直訳する

井上まどか

いのうえ まどか

と「黒い草」を意味し、植物の種としては「オウシユウヨモギ」のことを指す。これが「ニガヨモギ(苦よもぎ)」に近い種であるため、原発事故が起きた当時、キリスト教の聖書のなかの「予言」が成就したとも受けとられた。その「予言」とは、ヨハネ黙示録に見出される「第三の御使いがラッパを吹き鳴らした。すると、たいまつのように燃えている大きな星が天から落ちて来て、川々の三分の一とその水源に落ちた。この星の名は苦よもぎと呼ばれ、川の水の三分の一は苦よもぎのようになった。水が苦くなったので、その水のために多くの人が死んだ。」(八章一〇―一二節)という文言である。

この聖書の文言を「予言」とみなす解釈は、事故発生

当時だけではなく、その後も生き続けている。事故発生から一五年以上経って制作されたチェルノブイリ・イコンには、天から落ちる星が描かれ、イコン制作に関わった教会は、その星を「苦よもぎの星」と説明している。

予言の成就という見方を強調しすぎると、原発事故のような受苦はチェルノブイリという土地とそこに住む人々の宿命であるという考え方に傾斜することがある。そして宿命論的解釈に偏ってしまうと、共感・共苦の機会が失われがちになる。しかしチェルノブイリの場合、宿命論的解釈がみられる一方で、被害者救済のための支援のネットワークは世界中に広がり、また、犠牲者の追悼が地域を超えて行なわれている。

犠牲者を追悼し、四半世紀が経ってもなお健康被害に苦しむ人々の支えとなるような行事の開催や追悼碑建立は、チェルノブイリやその近郊の被害の大きい地域に限られない。ロシアやベラルーシの各地に追悼碑は建立されている。これは、原発事故の犠牲者がウクライナ出身者だけではない、ということももちろん関係している（たとえば、事故処理作業員八五万人のうち、ウクライナ

以外の出身者は約六パーセントを占める⁽¹⁾。

しかし、それだけではない。核エネルギーの使用が結果としてもたらす放射性物質による被曝、およびそれによる健康被害という経験を共有する人々の間で、追悼の営みが伝播し、受け継がれていっている。たとえば、核実験や核兵器工場の事故によって住民が被曝した土地がその経験によって連帯するのである。そこでチェルノブイリ・イコンは、ロシア各地の放射線被害の土地の記憶と結びつき、さらに二〇一一年の福島原発事故の犠牲者追悼とも結びついている。

イコンはこれらの追悼の営みを媒介するもののひとつとしてある、ということを示すのが本稿の目的である。以下では、チェルノブイリ・イコンを媒介とする記憶の伝播と共有について論じることとしよう。

二 チェルノブイリ・イコンとは

本稿で「チェルノブイリ・イコン」と呼ぶイコンには、大別して三種ある。救世主（キリスト）のイコン、生神女（聖母マリア）⁽²⁾のイコン、さらに被曝した子どもを治癒す

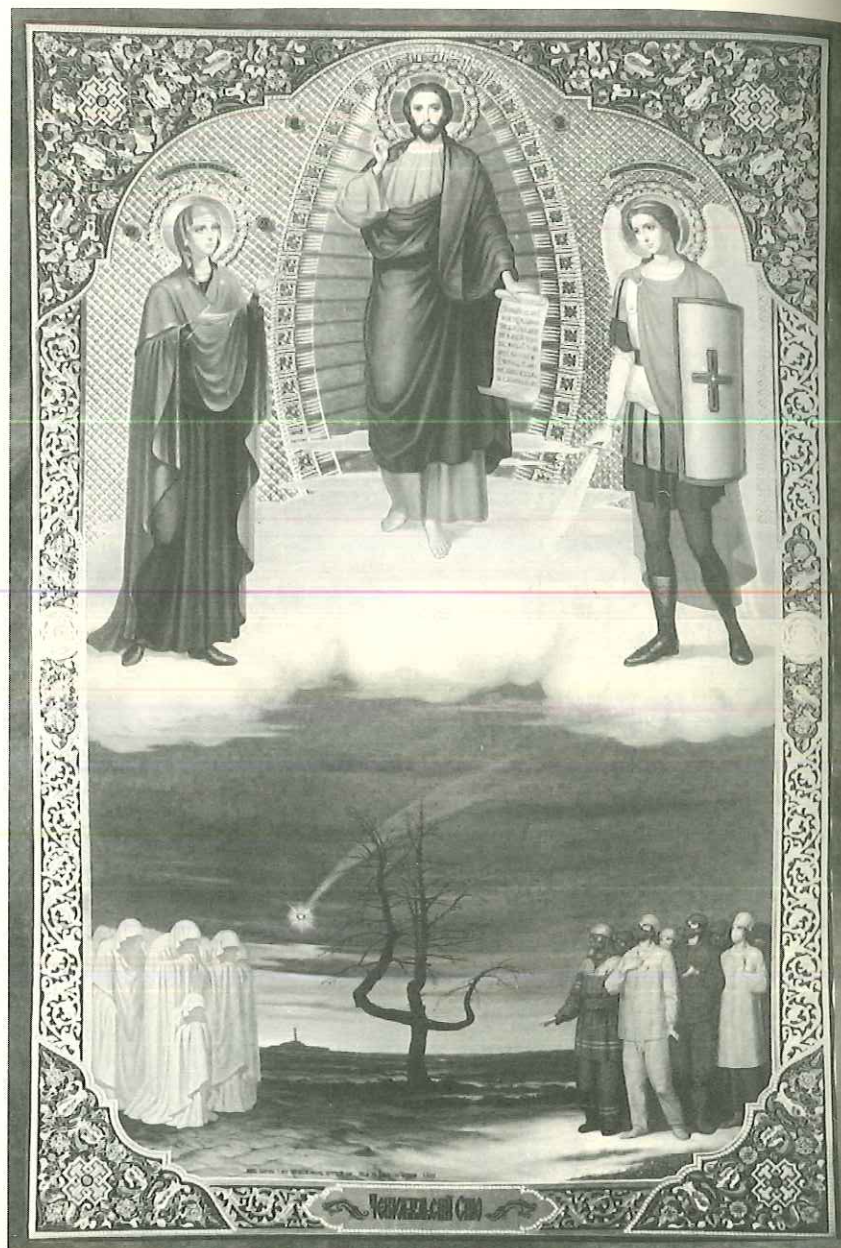


図 1